

県オリジナル中晩柑 ‘はるき’ の 幼木・着果・貯蔵管理技術について

和歌山県果樹試験場 副主査研究員 前田 公博

【要約】

‘はるき’（写真1）の現地へのスムーズな普及を図るために、幼木の枝梢管理、着果管理、貯蔵管理技術の確立に取り組んだ。幼木の枝梢管理は、定植後2～3年放任し、その後に切り返しを行う管理が適しており、着果開始後の適正葉果比は120程度である。また、収穫した果実をMA資材で包装することにより、常温で1か月、冷蔵との組み合わせで2か月程度品質を保持することができる。

【背景・ねらい】

‘はるき’はウンシュウミカンに続く県産カンキツの出荷を拡大する品種として期待されているが、その品種特性を踏まえた適切な栽培管理が必要である。また、カンキツの流通が少なくなる4月以降に出荷するための貯蔵管理技術も求められている。そこで、幼木・着果管理技術および貯蔵管理技術の確立に取り組んだ。



写真1 ‘はるき’ 果実

【成果の内容・特徴】

- 1) 幼木の初期生育を促すためには、定植後2～3年程度は枝梢管理を行わず放任管理することで根の生育を促し（図1）、その後に切り返し・芽かき・摘心などの枝梢管理を始めることで初期生育が旺盛になる。
- 2) 連年安定果実生産のためには、葉果比120を目安に摘果を行うことが有効である（図2）。
- 3) 貯蔵中に生じる障害果（しなび、コハン症など）の発生抑制のためには、MA包装資材（商品名：P-プラス）で個包装またはコンテナ単位で包装（写真2）することが有効である。ただし、貯蔵温度が上昇する4月以降には包装の有無に関わらず障害果の発生が急激に増加するので、常温貯蔵では3月末までが限度である。なお、冷蔵（8°C）下で貯蔵を行うことで、貯蔵期間を常温よりも1か月程度延長することが可能である。

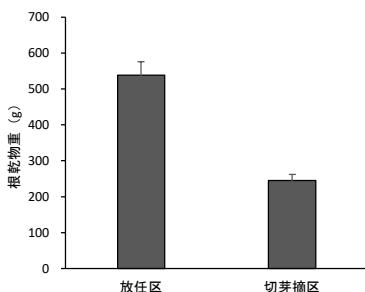


図1 根の乾物重の比較

（植え付け2年目）

注）図中のバーは標準誤差 (n=3)

切芽摘区：切り返し・芽かき・摘心

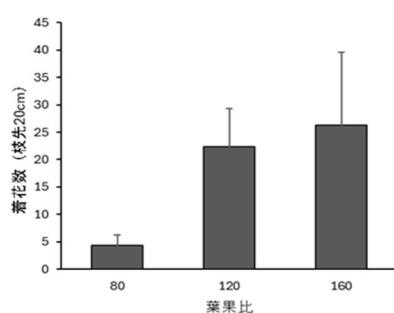


図2 葉果比別の着果翌年の着花数

注）2022年度に葉果比を設定、収穫し、

2023年5月12日に着花数を調査

エラーバーは標準誤差 (n=3)



写真2 MA 資材 コンテナ包装